大なる哉こころ

黒田大圓
（武志）

暗中模索

私は、通常、男兄弟七人のうちの五番目といっておりますが、実は長兄が四歳の時、大腸カタルで亡くなり、その化身が子育地蔵として実家の寺にまつられておりますので、戸籍上は、八人兄弟で、私は第六番目ということになります。

何しろ、男七人の兄弟ですから、両親はたいへん苦労しました。栃木県の大田原というところで、田舎町です。お寺は、伽藍は非常に大きなものですが、経済的には決して裕福ではありませんでした。

学校には入れてやるが、卒業したら一切かまわん、勝手にやれというのが父親の教育方針でしたから、学校は入れてもらうことになりました。

しかし、皆さんもご同様だと思いますが、学校はどこにしよう、卒業したらどこに就職しよう――これは青春時代の実に大きな問題であり夢でもあります。私は高校は大田原高校でしたが、田舎ですと、やはり早稲田、慶応というのが憧れの的でして、金がないから

慶応は入ったとしてもうまくいくまい、早稲田を出て学校の先生になろうか、というのが夢でした。それでかなり一生けん命受験勉強をしたつもりです。

三年生の夏休み頃、二番目の兄が開教師としてアメリカに渡ることになりました。私は、世界中で勉強してみたいというのが小さい時からの憧れでしたので、兄が行くならぼくも行きたい、一体将来どうしたらよいか、と兄に相談しましたところ、「お前は坊さんが似合う。親爺にもそのことを話している。そのほうがいいよ」というんです。

「そうですか。みんながそういう意見なら、坊さんになりましょう」ということになり、坊さんになるなら駒沢だということで、駒沢大学に入りました。それで、駒沢を出まして、アメリカの兄に、「ぼくもアメリカに行きたい」と手紙を出しました。するとこういう返事が来たんです。「四年制の大学を出たぐらいじゃ、アメリカ人に仏教など説かれるものではない。せめて大学院ぐらい出ろ」と。そこで大学院に進みました。

大学院を出て、早速手紙を出しましたら、「大学院で二年や三年勉強したって何にもならんよ。坊さんなら修行が必要だ。修行しろ」というんです。そこで総持寺に行きました。修行といいましても、世間的にみますと、全く下積みの仕事です。当番にあたれば起床は二時、みんなが寝ている間に雑巾がけをし、みんなが起きて坐禅する前に火をおこし、その上、古参の雲水の部屋を掃除して火を入れとくんです。それで金が貰えるわけじゃなく、月に五百円か七百円ぐらいの手当

です。全くやり切れない気持で、いやいやながらつとめましたが、これをやらんと資格がもらえないんです。高校卒ですと五年かかるんですが、大学院を出てますので半年で資格がとれるんです。資格を貰ったので、また兄のところに手紙を出しました。「半年修行して一応形はととのいました」と。すると、「お前、半年や一年の修行で何ができるものか」と、大目玉を喰らったのです。そういわれてみれば正にその通りで、いやいやながら半年がまんして資格を貰ったところで、何一つ身についてないのです。手紙には、「永平寺に行け」と書いてあるものですから、これまたいやいやながら永平寺に行きました。こんな気持で修行しても何もならんことなのですが、その頃の私にはまだそれがわかってなかったのです。

僧堂に入れてもらうには、まず「旦過寮」に入らなくてはなりません。旦過寮というのは、いわば僧堂に入るための準備教育をするところで、朝の三時から夜の九時まで、十八時間も坐らせられます。普通一般には一週間か十日ぐらい入れられますが、私は「こいつは生意気だゾ」とマークされたのでしょう二週間も入れられました。〝こんなところにおってもつまらんなア。早く娑婆に出て勉強せんと時代に遅れてしまう〟——こう思ってるうちに痔が悪くなって「延寿堂」(病室)に入れられたんです。

ところで私は、大学では茶道部の会長をしてましたし(今もOB会の会長をしてますが)、また、世話好きなほうでしたので、先輩、後輩の中に親しい人が多くおりました。そんなわけで、親しい後輩の一人が、永平寺名物の擂粉木羊羹をころもの袖にかくして差入れにやって来たんです。そこで考えさせられました。〝こんな風にみんなに迷惑かけちゃ悪い。大体こんなところは修行にならん〟ということで、「体の具合も悪いので、しばらくの間お暇をいただきたい」と願い出て、体裁よく永平寺を逃げ出したのです。が、困ったことに金がないんです。一銭もなかったんです。それで後輩から千円借りまして、永平寺をたって福井まで出ま

大本山永平寺安居の時

したが、バスや電車に乗ったりすると、百円、百五十円となくなるんです。心細かったですね。その当時東京まで千二百円ぐらいかかるのでしたが、八百円しかない。そこで托鉢をはじめまして、福井の市内を一巡したら夕方になりました。〃四、五百円ぐらいはあるかな、東京に帰れるだろう〃と思い、托鉢をやめていそいで電車に乗ろうとして、切符を買おうとしたのですが、金が中々出て来ないんです。すると駅員は「では入場券でお入りなさい。中で精算してください」という。北陸ではお坊さんを大事にしてくれます。これは有難いと心に感謝して、入場券をにぎってホームに出たんです。すると、上り下りの急行が同時にホームにとまっており、ベルが鳴りひびいております。その時は早く東京に帰りたい一心で、ホームを走り、飛び乗り、〃これで東京に着ける。よかった、よかった。金が足りなければ、行けるところまで行こうと〃思いまして、托鉢でいただいたお金を窓きわのところに、十円、二十円と積みました。うれしくて夢中でした。四百五十

円もありましたので、もう大丈夫だと安心しましたら、車掌のアナウンスがあるんです。聞いてると「この列車は富山を経由して直江津に行く」というんです。〝なに？　直江津？　こりゃ、えらいことだ。あべこべだ。金はあとわずかしかない。えらいことになった〟　そこで車掌さんに聞いたんです。すると、直江津に着くのは十時ぐらいとのこと。その頃は寒い時でしたので、こりゃ、体に悪いと思いまして、富山で下車したんです。

富山には、総持寺で修行していた私の大学時代の後輩がいるんです。自分のお寺ではなく、よそのお寺に用僧（ようそう）といってお手伝いをしておりましたので、その彼をたずねてゆきました。八時半ごろ富山の駅に下車して、手甲・脚絆・草鞋ばき姿で歩いてゆきました。お寺では九時には「開枕（かいちん）」といってみな休むのです。「ごめんください」「ごめんください」といっても中々出て来ないんです。しかし、帰るわけにもいきません。行くところがないのですから。ようやくして「おー」と

大本山総持寺安居の時

いう声がして戸を開けた若い雲水、それが私の目指した後輩の松本君だったのです。
「黒田先輩じゃないですか。永平寺へ行ったと聞いてましたが。どうした？」
「いま、永平寺を乞暇（こうか）して来た。肝臓が悪いし痔が痛くてやり切れんから逃げて来た。今晩泊めてくれ！」
「そうか――」
「とにかくあがらせろよ」
といった具合で、ようやく草鞋を脱ぐことができました。
酒も呑みたかったんですが、痔に悪いので一合ぐらいでがまんして休ませてもらおうとしたら、松本君が、
「あしたからどうする？」というんです。
「どうしたらいいだろう。金がないんで千円借りて、托鉢したがこれしかない」
「そうか、じゃ、オレ二千円貸してやるよ。だけど折角来たんだから、明日、托鉢して帰れよ」
そこで次の日、朝九時から三時まで托鉢したんです。
富山は仏国（ふっこく）ですから、一円、二円、十円という風に、どこの家でも喜捨してくれるんです。お金が応量器（おうりょうき）（食器ですが、托鉢の時はこれをささげ持って、お金を入れてもらいます）いっぱいになりました。帰ってかぞえてみたら八百円ほどあるんです。そこで松本君に言ったんです。
「こんなにいただけるんじゃ、一日では勿体ない。もう一日させてくれ」
といって二日目をやりました。やはりたくさんいただきました。そこで千円札に両替してもらって、仏様におあげしました。貰ったものは必ず、まず仏様におあげして、それを仏様からいただくんです。
松本君がいうんです。
「黒田さん、折角ここまで来たんだから、もう二、三日托鉢したらどうです。それから能登を托鉢したらいいよ」
「あそこも仏国だし、それに総持寺の祖院がありますからねえ」

ここでちょっとつけ加えますが、鶴見に大本山総持寺がありますが、もともとは能登にあったんです。それが八十年ほど前に火災で焼けてしまいました。当時の人は偉かったですねえ。永平寺が福井の山奥にあって、総持寺が能登の突っ端にある。これでは地理的に片寄り過ぎている。禍いを転じて福としなくてはならぬとて、鶴見に移転したのです。そこで、大本山総持寺の祖院にお詣りしようと思って行きました。もち論托鉢しながらです。いやァ、お金がたまるんです。〝こんなうまい仕事はない。一生けん命やったら金の使い途に困るんじゃないか〟そう思って、来る日も来る日も托鉢を続け、ついに日本を一周することになるのです。それにはまた別のワケがあったのです。

日本一周托鉢行脚

話は前に戻りますが、永平寺に修行に出かけようと思って、その用意をしておった時のことです。

それは九月のお彼岸の時でした。たしか、彼岸に入った次の日でした。私はその頃、東京五反田にある小さな寺におりました。ほんとに小さな寺で、彼岸にもあまりお詣りがありません。夕方になって、もう誰も来ないし、一杯呑もうかと思ってると、ガラッと戸が開いたんです。寺といっても、本堂が八畳、その隣りに六畳間があるだけですから、想像を絶する小さな貧乏寺なんです。戸が開いたんで、台所から出て本堂をのぞきますと、一人の男が真ん中に坐って、本尊様を拝んでいるんです。

気になったものですから、「どうしたんですか」というと、

「私は殺されるんです」というんです。

これはただ事じゃないと思いまして、わけを聞きますと、「私はやくざです」と言って、パッと手を開いてみせるのです。斬りキズがあるんですが、一度や二度のキズではないんです。そして、「足を洗わしてくれ」というんです。

「実は昨日、借金の取り立てに行って来たんです。いや、やらされたんです。ところが、その家にあったのは、テレビとタンスと子供の机ぐらいのものなんです。親分はみな持って来いというんです。しかし、テレビは子供たちが見ている。可愛想にと思ったが、親分の命令に従わにゃならんので、トラックに積んだんです。お母さんと子供は、『あんたら狠だ、鬼だ』というんですねえ。そんなにまで言われて生きるのは真ッ平だ。そう思って、夕べ足を洗う決心をして、逃げて来たんです。つかまれば殺されます。そこで和尚さんに相談に来たんです」

というんです。私は大学院を出まして半年足らずの頃でしたから、娑婆の血生臭い話など、どう処理したらよいのか見当もつきません。それで、「殺されちゃ大変だ。どうしよう」と真剣に考えたんです。そして言いました。

「あなたを救える道は警察の力を借りるしかない。いますぐ警察に行くか、暗くなってからにするか、とに

かく警察に行こう。ここは荏原警察と大崎警察の縄張りの境い目で、この寺は荏原警察の管区だが、警察に行くには大崎警察署の方が近い。しかし、人目につきやすい。荏原の方は交番がすぐ近くにある。だがちょっと頼りないかなァ……」

ところがその男は、「警察には始めから終りまで迷惑かけどうしで、これ以上お世話になったんじゃ申訳が立たないから、逃がしてくれ」と、深刻な顔で合掌して頼むんです。そこで私も男気を出して、

「よし、俺はあんたを逃がしてやる。だけど、つかまって殺されたらどうする」といったら、「それでもいい」というんです。

「よし、殺されてもいいというんなら、あんたは本当に俺に命をくれるか」というと、「あげます」といい、ナイフを取り出し、「ここで死なせてくれ」というんです。

「ちょっと待ってくれ。ここで死なれたんでは俺が困る」さてどうしようと考え、「あんたが本当に殺されてもいいんなら、俺はここから逃がしてやるが、どこか目当てがあるのか」と聞くと、「北海道へ行きたい」というんです。

「そうか、北海道か。こりゃ二日かかるなァ」

その頃は新幹線もない時代で、夜行に乗って二日がかりなんです。

「北海道に行くには金がかかるが、金あるのか」というと、持ってないんですね。そしてネクタイもワイシャツもよれよれなんです。

北海道へ行ったってすぐ仕事にありつけるわけではないし、金は持ってない。でも行かしてくれという。私もホトホト困りましたが。「じゃ、待て」といって、お婆さんに話したんです。そして、「いったい家に金、どのくらいある。あり金、全部出してみろ」といったら、「お彼岸のお経料が三万五千円あります」という。それから家の生活費を差引くと三万三千円は何とかなる。私は三万三千円を持って、

「これが俺の家の全財産だ。これを全部あんたにあげ

る。旅費と職を探すまでの費用にあてなさい。しかし、あんた、ネクタイもワイシャツもボロボロじゃないか。北海道は寒いんだよ。といってもこの金でシャツ買ったんじゃ困る」

そういって、私のワイシャツとズボンをやり、学生時代に着ていたトレンチコートもやった。ちょっとダブダブだけど、袖を折れば何とか使える。背広は無理かな、ちょっとでかいけど着ろ、といってふろしきに包んでやった。さらに、仏様からお供物をおろして、「これは汽車の中で食えよ。二食ぐらいは助かるよ」といって逃がしてやったんですが、その時、私、ジーンとこみ上げてくるものがありまして、

「何か思い残すことないのか」というと「ありません」という。「殺されるんでもないのか。俺ならあるよ。あんた両親いるか」というと「いる」というんです。何処に住んでるとたずねると名古屋だというんです。そこで私は、「あんたの最期の出会いはこの俺だ。あんたが殺されたら俺があんたの両親に会って話してや

大本山総持寺特別僧堂安居の時

やるから、住所書きなさい」と、半紙と筆を出したんです。そしたら正坐しておもむろに書く瞬間に字を考えたんですね。人間、殺される時の心境はこういうものかと、私はその一部始終を見ておったんです。名古屋市中区……中村……三十八歳と書いたその紙を受取り、「これは俺があずかるが、俺にはもう一つ心残りがある。あんたを今日まで育ててくれたのはご先祖さまなんだよ。そのご先祖さまにお礼だけは述べて行け」

といって、「中村家先祖代々之精霊」と塔婆に書いてお経をあげてやったのですが、その時また感じたんです〃人間いよいよ殺されるということになれば、これがほんとの姿かなァ〃と。そして陽の沈むのを見て、逃がしてやったんです。その逃げる姿がまた印象的なんです。ボロボロの靴をはいて、荷物を持ってターッと出て行ったんです。そしてそれっきり、何の音信もなかったんです。それで私は非常に心配したんです。これは殺されたかも知れない。そうすると私は大変な罪を犯したことになる。いや、えらいことしたなァ。菩提を弔らってやらねばならぬ〃と、そう考え、この時、全国を托鉢行脚しようという決意をかためたのであります。実は、「宗祖を通して釈尊に還れ」というのが私の誓願に似た気持でしたので、藤井日達上人のお力で全国各地にまつられておるお佛舎利を巡拝しようと常々思っておりました。それがこのやくざとの出会いによって実現化することになったのであります。

大いなる転機

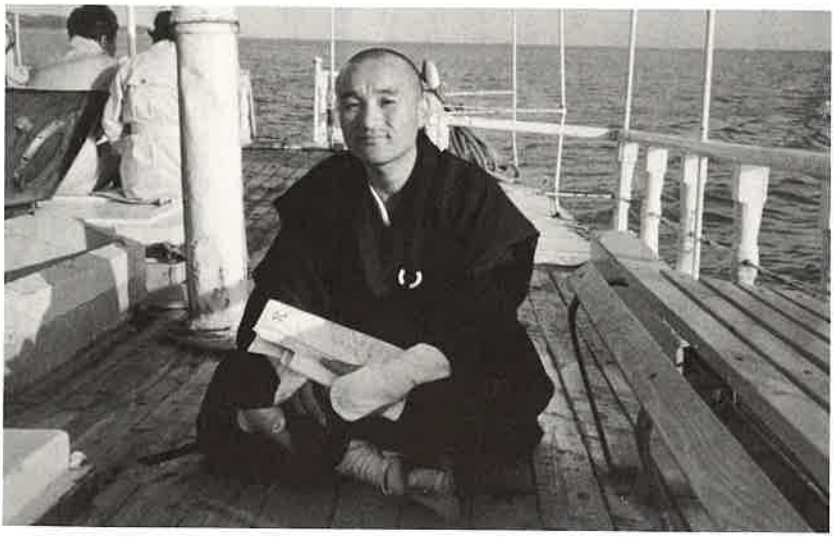
来る日も来る日も托鉢三昧の毎日が続きました。『般若心経』を読んで最後の真言「羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶」を繰返して唱えるのですが、この真言は、「行こう、行こう、手をつないで共に行こう、苦しみ悩みのない世界に行こう」という意味でありますので、一心にその気になって唱えるのです。雨の日も風の日、昨日も今日もあさっても、毎日同じことをやっておったんです。

大本山永平寺勅使門前にて

あの網代笠というものはおもしろいもので、水平より上は見えないんですが、ちょっと顔を上げるとみんな見えるんです。おもしろいことにこっちでは見えても、向うからは見えないのです。そこでお店の前に立つと、きれいな娘さんが、手をふって、邪魔だから行ってくれ、「お通り」というんです。そこでちょっと顔をみて、〃へん、顔は美人だが心は鬼か。この俺に供養もしないような乾いた心では変な処にしか嫁に行けんぞ〃と、まァそんな気持になるんです。また、ほんのちょっぴりしかくれないと、〃こんな大きな家でケチくさいなァ。もう少しよこしてもいいのに〃などと思うんです。ところが一ヶ月、二ヶ月も続けていると、そんなこだわりがなくなるから不思議なものです。こうして、人間の生き方というか在り方というか、私なりにいろいろ身をもって体験したわけであります。

そして京都に行きました。十一月の末でしたが、三日間、台風で荒れ狂ったのです。三日間も暴風雨に見舞われますと金がなくなって来たんです。ここで平生

の生活ぶりをお話しますと、朝九時ごろ宿を出まして昼まで托鉢をし、昼食をとって、午後ボツボツ宿探しをします。お寺に泊めてもらうには、それなりの作法があるんです。三時ごろに行きまして、「拝宿宜しう」と頼むわけです。そして泊めていただくことになれば、草をむしったり、玄関の掃除をしたり、風呂をわかしたりして泊めていただくのです。そして、その日托鉢でいただいたものは、そっくりそのまま全部仏様にあげるんですが、それを返してくださる。その時、草鞋銭といって、新しい草鞋を買うお金として百円か二百円くださるんです。ですから、お坊さんをしている限りは生活に困ることがないんですが、中々泊めてくれるお寺がないんです。方丈が留守だからとか何とか理由をつけて断わるんです。物騒な世の中ですから無理もないことなんです。こうして泊めてくれる寺がない時は、木賃宿に素泊りさせてもらうんです。二百五十円か三百円で泊まれますが、ノミが出てくるようなところで寝なくてはなりません。ですから三日間も暴風



能登の外洋船上にて

雨に見舞われると托鉢ができませんし、お金が底をつくようになるのです。托鉢する坊さんは、「涅槃金」といいまして、不慮の死をとげた時の葬式の費用を常に携帯しているのです。お袈裟と経本と涅槃金、それに「三物」といって、仏法の世界での身分証明書、これは坊さんの誰しもが持ってなくてはならん大事なものなのですが、その涅槃金、私は千円持っておりましたが、いよいよ一銭もなくなったので、その千円の涅槃金に手をつけはじめたんです。そしていよいよ五百円足らずになりました。

京都というところは、大きなお寺はまず泊めてくれません。小さな尼寺のようなところをあたってみるのですが断わられます。雨は止まない。ズブ濡れで京都の郊外まで出かけて行くのです。庵主様がいない、方丈が留守だから「別のお寺でお願いしてみてください」「何処にありますか」ときくと、「四、五百メートルいくとお寺があります。そこなら泊めてくれます」というので、そこへ行ってみると、「今日はね、お寺のお客さんがあるから泊められない。もう少しさきにお寺がある」というんで、教えられた通り行ってみると、案の定断わられる。仕方なしに京都の駅に行って、「一番安く泊めてくれるところはないか」と、観光案内の人に聞くと、「亀岡に行って探してごらん」というので、電車賃かけて行きました。お金は三百五十円だけになりました。亀岡の駅から五、六百メートル先に、傾きかけた家があって、頼んだら「二百五十円で泊める」というんです。朝から雨に濡れてびっしょりですし、風呂に入りたいといったら、先客がさきだからまだあとだとのこと。いつ入れるかというと、わからないというんです。「では銭湯ありますか」といったら、近くにあるというので、コーモリ傘を借りて風呂屋に行きました。こうして金は次々と出てゆき、九十円足らずになってしまいました。それでも酒が呑みたい。酒屋に行ったら、一番安いもの、四十五円という一合ビンがあったので、それを着物のたもとにしのばせました。あと四十五円残ったので、十円のコッペパン一

つにバター一つ買いました。そして旅館に帰って、酒呑んでパンを食べながら考えさせられましてねえ。

人間の命なんて安いもんだ。たった九十円か。さて、明日はどうしよう？

翌朝四時頃、ザーッと雨が降っている。こりゃ、えらいことになった。金はないし、何処へも行けない。七時になってもまだ雨は止まない。八時になった。その時ハタと気がついた。〝俺は坊さんだ。坊さんは何をやるんだ。何が出来るか。お経あげることしかないじゃないか。そうだ、お経だ〟と。

そこで、まだ半乾きのころもを着て、その木賃宿の主人に、「お願いしたいことがあります。お宅のご先祖にお経をあげさせてください」と頼みました。すると、主人、夕べ風呂に入れてくれなかったその主人がその家の仏壇の前に坐らせてくれました。私はありったけの声を出して精一杯読経しました。お経が終るとその主人は「本当にありがとうございました」と礼を述べ、「先生、おなか空いてるでしょう」ということ

ではじめて白いご飯にありついたのです。普通ならお布施をくれるんですが、ご飯がお布施代りなのです。そこは人間です。欲をかいてはいけない。ご飯をご馳走してもらえればこれ以上のことはない。そこで私は空を、天を仰いでみましたが、まだまだ晴れそうがない。しかし托鉢しないと金がないので、雨の中を外に出たのです。宿の主人が、「もう少し小降りになってからにしたらどうですか」というんです。私は「お気持は有難いが、いつ止むかわからないので出かけます」〝どうせここにいたって五分は五分、一時間は一時間。それより外で精一杯読経した方がましだ〟と思って、「羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆呵」と唱えながら街を歩いたんです。雨ですからどこも戸が閉ってますから、誰も相手にしてくれない。ところが、二時頃になって雨が止んだんです。女子高校の近くを通ってる時でした。学校から出て来た女の子の一団とパッタリ出会ったんです。私は男ですから、女性は嫌いじゃないけど、その時は女性も何もない。

ただひたすらに大きな声で「羯諦羯諦……」を唱えてました。するとどうでしょう。女学生たちが全部集まって来て、一円玉やら十円玉やら、ジャンジャン応量器に入れてくれるんです。見る見る間にいっぱいになりました。そしてその時、太陽がパァーと射したんです。そこで私、気がついたんです。人間は絶対に死なない。人間は救われてるんだ。念ずれば花開くんだ。正に万感胸に迫る思いでした。その時私は二十七、八歳でしたが、やっと、生かされている尊さを知らされたのです。それからというものは、もうこわいことも、うれしいことも、すべて超越して、これでいい、という心境になることができました。

そうしたいろんな出来事に出会いながら、日本を8の字にまわって名古屋に来たんです。丁度お正月の二、三日前でした。その時私は二、三千円の金を持っておりました。二、三千円持っておったんでは勿体ない。托鉢すれば金はどうにでもなると思って、朝日新聞社に行き、その金を歳末助け合いで使ってほしい、と差

出したのです。それでスッテンテンになりましたが、二十円残りました。その時私の頭をよぎったことは、逃したやくざのことは常に気にしていたのですが、名古屋に来たんだから、その両親のところをたずねてみようと思って彼が紙片に書いた住所の近くの交番に行ったのです。朝の八時ごろでした。丁度勤務交替の時でした。交番の前のコンクリートに坐って袈裟文庫の中から住所を書いた紙片を取り出して、たずねたんです。「ちょっと待ってください。調べてあげますから」といって調べているんですが、五分たっても十分たっても何の返事もありません。私はきたない恰好してるから、交番に入っちゃ悪いと思ってコンクリートの上に坐っている。やがて私を呼ぶので入って行きましたら、「先生、お坊さん、これ悪いけどねぇ、この住所ないですよ」というんです。その時ハッと気がついたんです。〝ああ、だまされたのか〟しかし、その詐偽師のおかげで私は日本中の仏舎利塔の巡拝が出来た。だまされたおかげで本当に尊い修行をさせてもらったのです。私は呵々大笑して、人生はこんなものだ。これが娑婆だ。と思いました。しかし、さすがにその時は肩の力が抜けました。いや、全身の力が抜けたというのが偽らざる心境だったと思います。

そこで、さてどうしようか。まず腹ごしらえをしなくてはとて、子供の雑貨を扱ってる店に行って十円のパンを買いました。

平常心是れ道

名古屋には三番目の兄の女房の実家があります。そこへ泊めてもらおうと思って、電話したら、番号違いでガチャンと切られてしまいました。これで無一文になってしまいましたが、万事休すではすまされない。野球場の近くだと聞いていましたので、五、六キロの道をテクテク歩いて、どうやら辿り着くことができました。

「丁度いいところへ来た。実は家中であんたを探して

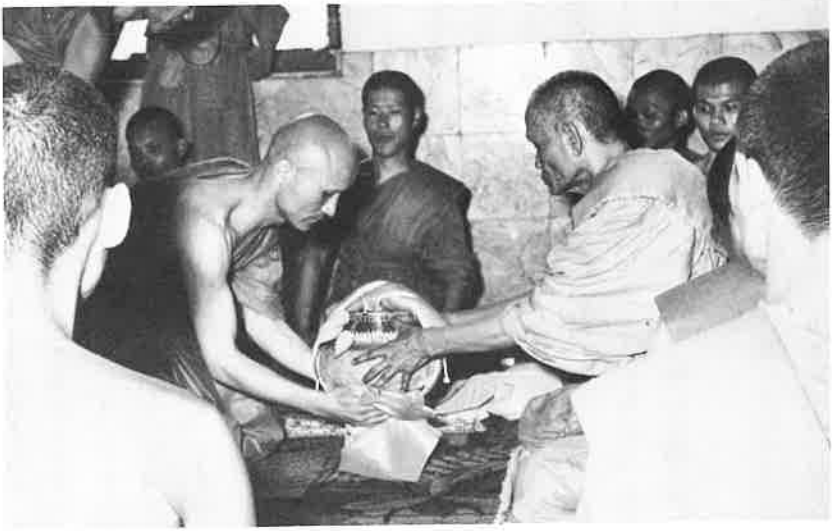
おって、『そちらに行ったら電話してくれ』と、何ヶ月も前から頼まれているんです」とのこと。

その理由は、二番目の兄が十年ぶりにアメリカから帰って来て、ぜひ会いたい、といってるとのこと。

「じゃ、悪いけど金を貸してください。私は一銭もないんです。三千円たのみます。家に着いたらすぐ送ります」

と言って金を借り、夜行で東京に帰り、東京で身仕度をして栃木の実家である大田原の寺に帰り、十年ぶりの再会を喜んだのです。もち論、長兄もおりました。私は得意になって、「私はありとあらゆることをして来ました。大変いい勉強をして来ました」といったんです。ところがアメリカ帰りの兄は、「そうだなあ、えらいもんだなあ、お前よくやったなア」とほめてニコニコしてるんです。ここでやめればよかったのですが、調子に乗っていい気になって自惚れ話をしたんです。すると長兄が、

「お前そんなに得たものがあるんなら、ここに出して



タイ国ワットパクナムにおいての得度式

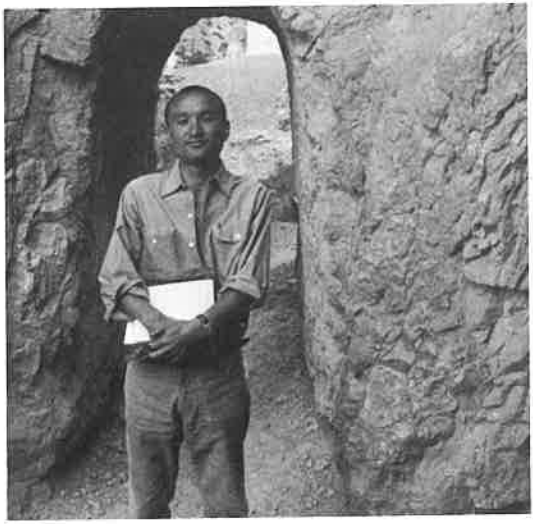
みろ」

というんです。そういわれてみると、何も出せるものがないんです。そこでいやというほど修行未熟に気が付き、これはいかん、人間修行しなくちゃだめだと、目が覚めたのです。

丁度その時、大本山総持寺に特別僧堂が開設され、全国で五人を募集するというんです。そこで早速申し込みをしました。しかし、俗気の強い私には、朝の三時に起きて夜九時に床に入るまでのきまり切った生活の型にはめられるのは性に合わないのです。ここでいよいよ海外雄飛の決意をかためるのであります。

私のねらいは、宗派にとらわれた日本の枝葉の仏教ではなく、本当の仏教を学びとることであります。枝葉も大切だが、幹も尊い、根はさらに尊い。根と幹がなければ枝葉の生命はない。宗祖を通して釈尊に還るのだ。そうだ、まずインドに行こう。お釈迦様が二千五百年前に何を説かれたのか、それをこの体で、肌で感じ取ろう。南方仏教の坊さんたちは、二百二十七の戒律をまもって生活をしている。金は使わない。かあちゃんは持たない。正午過ぎれば食事はとらない。一体どんなことしてるのだろう。そこでインドからタイ国に渡って向うの坊さんとしての修行を一年間つづけ、そしてこんどはアメリカに渡りました。いま白人の間の坐禅熱はすごいものがあります。ボヤボヤすると坐禅も逆輸入になりかねません。私はアメリカで二年、白人とともに坐禅にはげみました。そして日本に帰って来た。正に意気衝天の勢いでした。日本の奴に何がわかるか。何物にも捉われないこの俺の生き方を中外に示してやるという気慨に燃えて新しい寺を作ったんです。働きました。夢中で働きました。勿論いまでも夢中で働いております。人が何を言おうが、人から何と言われようが、そんなことどうでもよい。ただ独りわが道を行く信念のもとに働いて働いて働き抜いて、やっと四十六歳になりました。

私はこのごろ、いつも自分に言いきかせてることがあるんです。それは、人間万事塞翁が馬の故事です。



アメリカ横断旅行中(イエローストーンにて)

塞翁というのは、辺境の砦に住む翁のことで、塞翁が馬の話は淮南子という人の『人間訓』に出てくる話で、皆さんもご存知のことと思いますが、塞翁が、今でいうと一億円もするような素晴しい競争馬を買った人です。近所の人たちが「そんな高価な馬を買っても仕様がないじゃありませんか。そんな無駄金を使わないで、困ってる人に施してあげたら、あんた『最高の人だ』といわれますよ」というのですが、塞翁は名馬を買いました。すると半年も経つと、その馬が逃げてしまいました。近所の人たちはそれを聞いて、「お気の毒ですねえ。やっぱりあの馬は買わなきゃよかったんですよ」というのですが、塞翁は平然としております。それから三ヶ月も経った頃、その駿馬が帰って来ました。ただ一頭だけで帰って来たのではなく、もう一頭の名馬を伴なって帰って来たのです。近所の人たちは、前とは逆に「いやぁ素晴しい。あなたは先見の眼がある」と、ほめそやしましたが、寒翁は前と同様、喜ぶ色もなく平然としておりました。するとその後、

寒翁の一人息子がその名馬から落ちて足の骨を折って身体障害者になってしまいました。近所の人たちは「とんだ災害でしたねえ」と見舞いましたが、塞翁には別に憂える風が見えませんでした。すると、国が隣国と争うことになって、若者はみな軍隊にとられましたが、塞翁の息子は身体障害者のため兵役を免かれました。近所の人は塞翁に「あなたは幸せ者だ、親子三人が一緒に食事できるほど人生に幸せはない。戦争に行って、人を殺したり、殺されたりするよりも、罪をつくらず生きてゆけることほど素晴しいことはない」といったというんです。

吉凶禍福はあざなえる縄のごとく、誰にも予測できないのがこの世の中であります。ですから、どんなことに遭遇しても一喜一憂することなく、平常心をもって生きることが大切であります。禅の言葉に「平常心是れ道」というのがあります。平常心とは、読んで字の通り、平生あるがままの心のことですが、さればといって、物事に一喜一憂する心のことではありません。

飛行機に乗って雲の上に出ると、下界は雨でも上空はからりと晴れた青空であります。同じように、私どもの日常は、モヤモヤした分別妄想や、ドロドロした欲望の雲に掩われておりますが、そこを突き抜けると、まことにすがすがしいさわやかな心であります。そのすがすがしくさわやかな心がそのまま日常生活に活かされて、一挙手一投足が仏の道にかなう、それを「平常心是れ道」というのであります。

上といえば下、東といえば西、善といえば悪、利益といえば損失といった風に、私どもはすべてを相対的にみております。ここに取捨選択の心が起きて来て、そこに分別妄想が湧いて来ます。塞翁のように吉凶禍福を超越した心境になれば、下界がどんなに悪い天候でも上空は晴れた青空であるように、私たちはすがすがしい心でおられるのであります。

禅門で有名な『無門関』という本の「平常是道」という章に、こんな詩が載っております。

春、百花あり。秋、月あり。
夏、涼風あり。冬、雪あり。
もし閑事の心頭に掛ることなくんば。
すなわちこれ人間の好時節。

春は百花爛漫として咲き綻び、秋は月が美しい。夏は涼しい風が吹き、冬はすがすがしく雪が降る。つまらぬことにあれこれ思い煩うことがなかったら、春夏秋冬、いつでも人間にとって好時節である——という意味であります。

春夏秋冬、それぞれ趣きがあって、まことに結構な四季の移り変わりでありますが、それなのに、嘆き、悲しみ、瞋り、悩むのは、一体どういうわけでしょう。

それは、余計な分別、いらざるはからいが心の中にモヤモヤしているからで、これさえなければ、春夏秋冬、いつでもすがすがしい好時節であるというのであります。

では、いらざる分別や妄想をなくするにはどうするか？　それは、一切をみな仏さまにお任せすることであります。道元禅師の『正法眼蔵』に、

釈迦殿落慶式

ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもつひさやずして、生死をはなれ仏となる

とありますように、一切をみ仏にお任せすれば、おのずからそこに人間の好時節が訪れてくるのであります。

帰依三宝

聖徳太子は、かの有名な十七条憲法の第二条に、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり。即ち四生の終帰にして万国の極宗なり。何れの世何れの人か貴ばざらん。人甚だ悪しきは鮮(すくな)し。よく教うれは即ち従う。夫れ三宝によらずんば、いかでか枉(まが)れるを直くせん」とあります。すなわち、仏法僧の三宝は、生きとし生けるものの最後のよりどころであるので何人もこれを貴ばなくてはならぬ。人は生まれつきの悪人は鮮い（な

いという意味もあります)。よく教えればこれに従うものだ。それでも曲るのは三宝をよりどころとしないからである、というのであります。

「宗教なき教育は賢い鬼をつくる」といわれます。賢い鬼は社会をこわすことはできても、社会を建設することはできません。日本においては正しい宗教教育がおこなわれなくなって年すでに久しいのです。ここに今日の日本の憂いがあるのです。

さいわい私は、仏法僧の三宝に導かれて今日あることを得ました。『修証義』第三章に、

仏は是れ大師なるが故に帰依す。法は良薬なるが故に帰依す。僧は勝友なるが故に帰依す

とあります。「大師」というのは、今日の言葉でいえば大先生ということであります。私どもにとって一番大切なのは命であります。その命の使い方を教えてくださるのが大師、名医中の名医である仏さまであります。私どもは、肉体的には健康であっても、みな心の病いを持っております。煩悩妄想を持った病人なのです。その心の病いをなおすには、大師である仏さまの診断により、仏さまの調合した薬を服用しなくてはなりません。その薬が即ち法であります。だから、「法は良薬なるが故に帰依」するのであります。さて、その法を今日まで伝えたのが高僧名僧であります。これらの方々なくしては仏教は今日まで伝わらなかったのであります。だから、僧は勝友、すぐれた友であるわら帰依するのであります。

どうか皆さん、仏の教えによって人間的に成長されることを祈念して私の話を終ります。

横浜市立工業高等学校にて収録